

是弘遺跡 現地説明会

調査期間：令和7年4月1日～令和8年3月31日
調査地点：さぬき市造田野間田・是弘

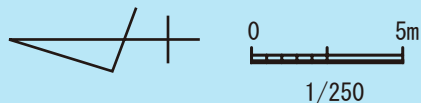
調査主体：香川県埋蔵文化財センター
調査原因：東讃統合高校建設

現在調査している7区では、弥生時代後期から平安時代にかけての河川跡を発見しました。河川の底近くからは、ほぼ壊れていない弥生土器が出土しています。また、となりの2-4区（昨年度調査）でも、多量の弥生土器に加えて木製品や焼けた竪穴住居の木材が出土しています。これらは東側の集落から捨てられたと考えられます。

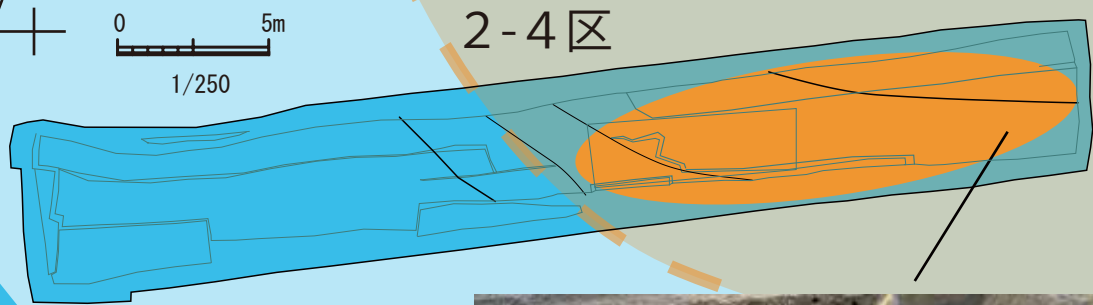
河川を埋めた土は粘土～細かい砂であり、水の流れはかなりゆるやかだったようです。一番上の層からは古墳時代の終わりから平安時代にかけての須恵器片が出土しており、古代まで河川が流れていたことがわかっています。ただし、一番上の層は遠浅にひろがる粘土層であり、この層が堆積したところには河川というよりも沼地のような状態だったと考えられます。



2-4区 河川堆積の様子（横断面）



2-4区



7-1区

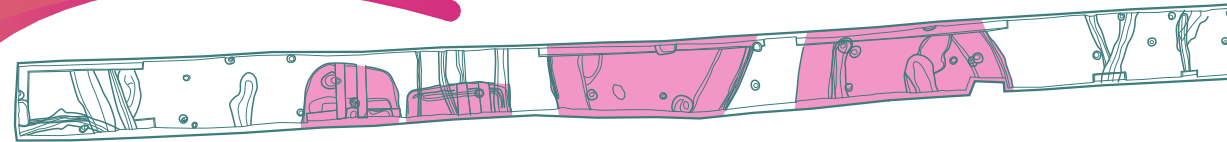
7-2区

公開範囲

廃棄

竪穴住居

2-3区



2-3区 竪穴住居跡（弥生時代終末期）



川岸に捨てられた土器

河川跡の東岸で弥生時代後期後半～終末期（約1800年前）の土器が多量にみつかりました。土器は近くの竪穴住居と同じ頃のもので、近くで生活していた人々が、不要になった土器を捨てたものと考えられます。

凡例

竪穴住居跡

弥生時代の河川

土器だまり



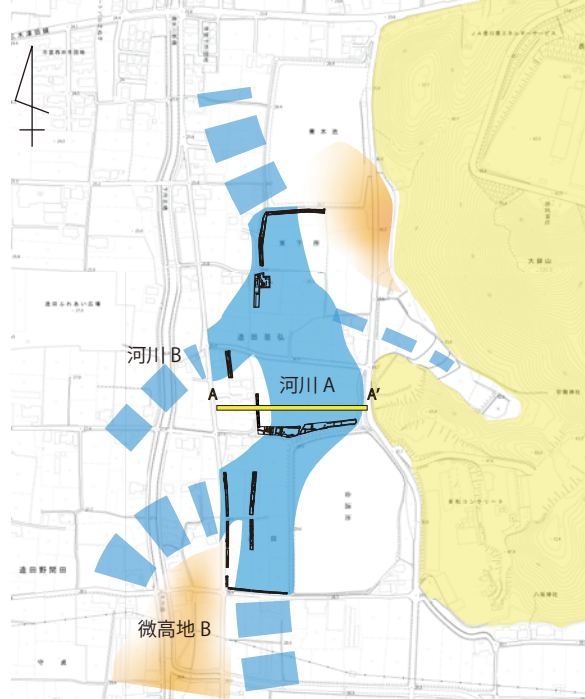
2-4区 川底にたまった土器

出土した土器のうち甕には、表面にススのついたものや加熱で割れたものが多いです。これらは土器を煮炊きに使った生活の様子を物語っています。

是弘遺跡の地形と土地利用の移り変わり

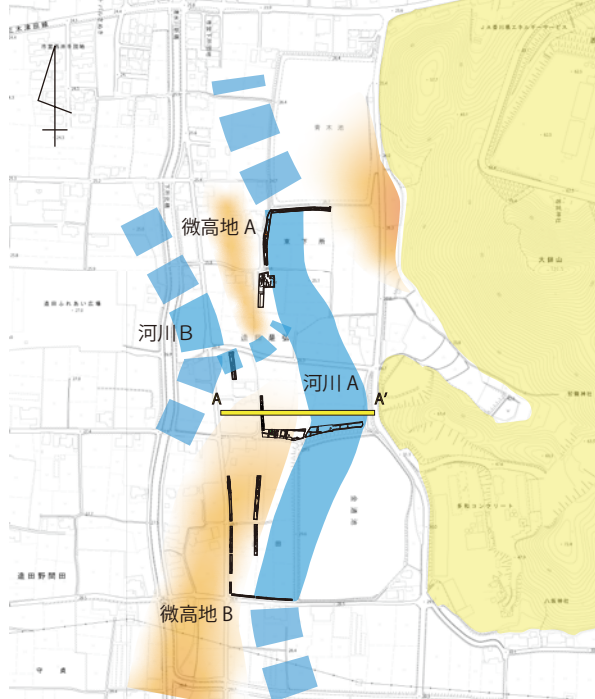
さぬき市都市計画図 1/2,500 に加筆して作成

～弥生時代前期（約 2800 年前以前）



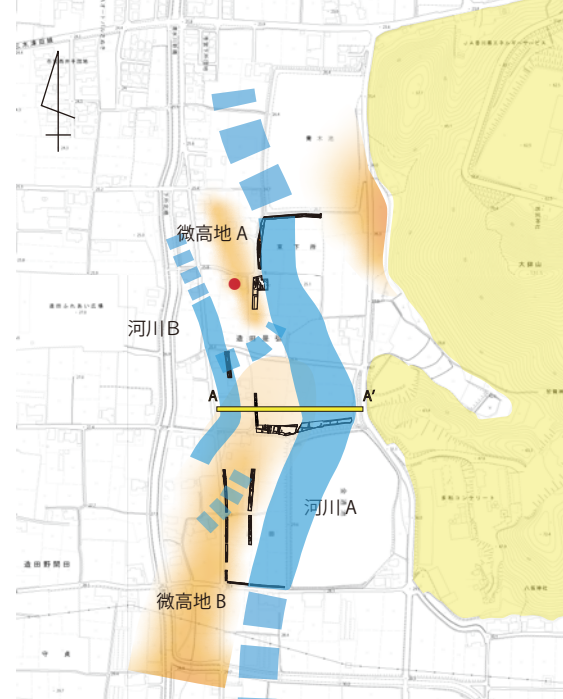
遺跡内には、幅の広い河川が南北に流れています。住居はみつかりませんが、河川跡から少量の土器片が出土しており、近くで人が活動していたようです。

弥生時代中期（約 2400 ～ 2000 年前）



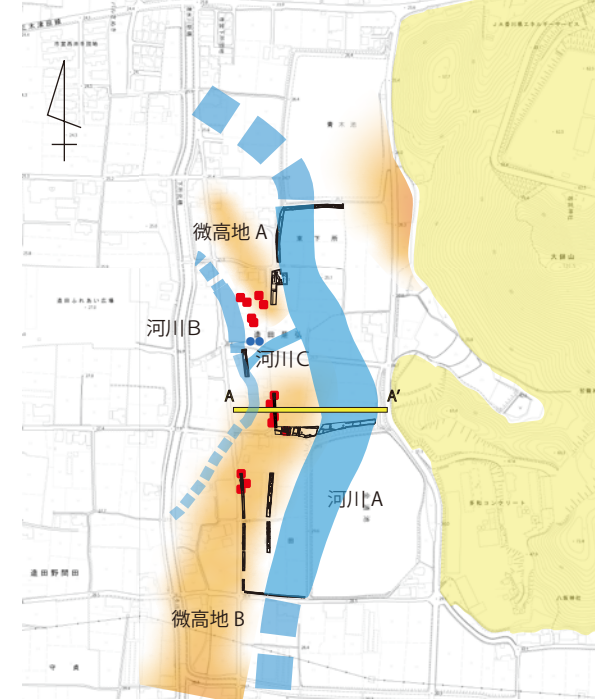
河川は水流で運ばれた土砂でしだいに埋まり、河川の間に微高地（周囲よりも小高い土地）が現れ始めます。

弥生時代後期前半（約 2000 ～ 1900 年前）



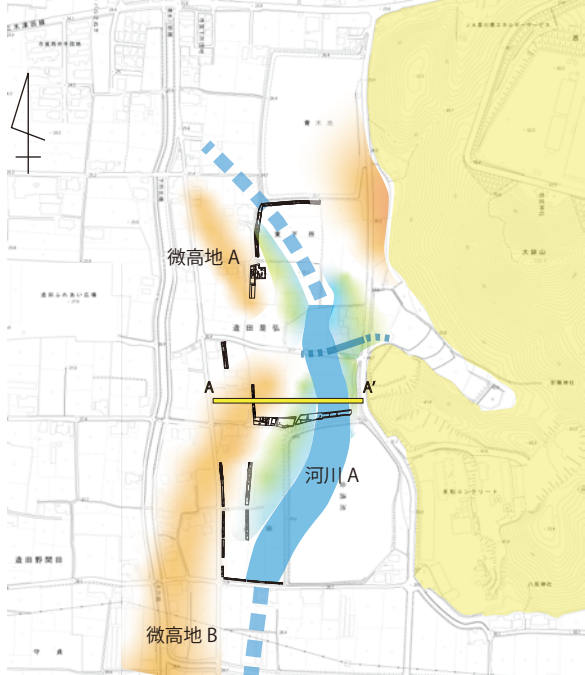
河川Bがさらに土砂で埋まって川幅が狭まるとともに、微高地がより大きく広がります。北側の微高地Aには竪穴住居が建てられ、人々の生活が始まります。

弥生時代後期後半（約 1900 ～ 1750 年前）



微高地A・Bがさらに広くなり、竪穴住居が多数建てられます。土器や石器など暮らしに使う遺物も多量に出土しており、是弘遺跡の集落は最盛期を迎えます。

古墳時代～平安時代



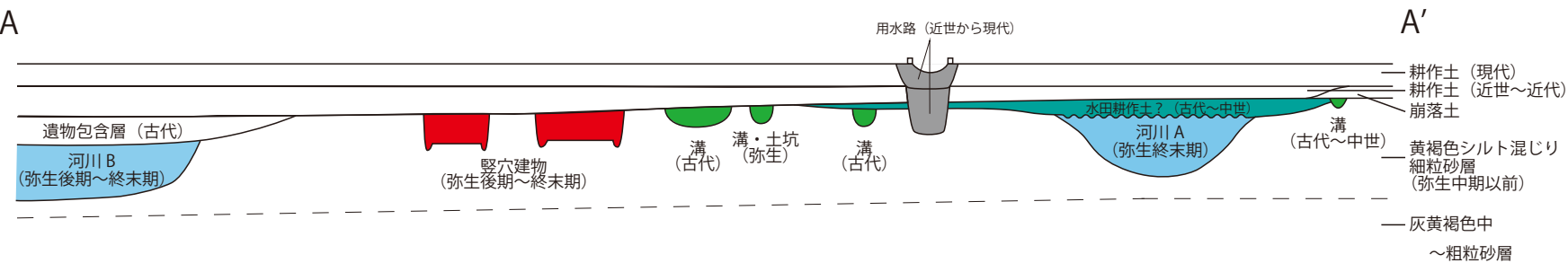
河川Bは完全に埋まり、河川Aもほとんど水の流れない、沼地のような状態になります。前の時期に栄えた集落は突如消えてしまい、周辺は沼を利用した水田となったと考えられます。

鎌倉時代～江戸時代



河川Aも完全に埋まってしまい、水田に必要な水を得るために、江戸時代の初めにため池が築かれます。現在の遺跡周辺のため池と水田が広がる風景は、この時代に出来上がります。

A



凡例

- 河川
- 溝
- 掘立柱建物
- 竪穴住居
- 墓
- 微高地
- 山地
- 水田？

4月から7月は、河川跡の発掘調査を実施しました。その結果、河川とともに暮らした人々の姿がみえてきました。

弥生時代には、人々は河川によってつくられた微高地を住む場所として開発し、河川は水の確保に利用され、ごみ捨て場にもなっていました。古代から中世にかけては、堆積作用によって河川の幅が狭まり、湿地状になった場所が米作りの場として活用されました。近世には湧水を利用したため池がつくられ、さらに近代以降には配水施設を設けて米作りが現在まで続いてきました。

このように是弘遺跡周辺では、河川を利用して、長きにわたり暮らしを営んできたことがわかってきました。



香川県埋蔵文化財センター

〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷 5001-4

TEL 0877-48-2191 FAX 0877-48-3249

